

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00814

研究課題名（和文）政治的暴力の展開と議会での「語り」

研究課題名（英文）Dynamics of Political Violence and Legislatures

研究代表者

大林 一広（OBAYASHI, Kazuhiro）

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：30598149

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 14,040,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、政治的暴力に対して議会や議員がいつ、どのような反応を示すのか、を記述した上で、その背景にある要因を分析することである。そのために、フィリピン、コロンビア、ナイジェリアの国会議事録を収集し、テキスト・データを構築し、トピック・モデルや回帰分析によって分析した。さらに、現地調査を実施した。内戦下で議員が市民の暴力被害や和平プロセスなどについて発言する一方で、例えばコロンビアでは軍の死者への言及が少ないことなどが分かった。また、発言の背後には選挙区での暴力に加えて再選動機があること、但しその効果は各国の政治制度を媒介して表出すると推測されることなどが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、「民主主義は対反乱政策が苦手である」、「強い議会は内戦の終了可能性を低下させる」といった既存研究のマクロな主張に対して、ミクロ・レベルでのメカニズムを提示すると共に、それらの主張が妥当となる条件についても示唆する。次に、議員発言が政治的暴力に与える影響については、研究が進んでいない。そのような研究では、議員発言に影響を与える要因について、留意する必要がある。本研究の分析結果はその一助となる。最後に、収集した議事録のテキスト・データは、今後公開を予定している。これらのデータにより、政治的暴力だけでなく、（内戦下の）経済や社会保障など多様な問題についての議員発言の分析が期待できる。

研究成果の概要（英文）：The primary purpose of this research is to describe patterns in legislators' speeches in conflict-ridden countries and analyze their determinants. For this purpose, we compiled text data from Hansards in parliaments in the Philippines, Colombia and Nigeria, and examined them with topic models and regression analyses. We also conducted field research in the Philippines and Nigeria. The results of our analyses show that legislators in conflict-ridden countries deliver speeches on topics such as civilian casualties and peace processes, while not on military casualties in Colombia, for example. The results also suggest that violent events in their constituencies and reelection motives are behind these speeches, although their effects appear mediated by political institutions.

研究分野：国際関係論

キーワード：議会 暴力 内戦 テキスト分析 フィリピン コロンビア ナイジェリア

1. 研究開始当初の背景

国内の政治的暴力の展開と共に、各国の議会はどのような反応を示すのだろうか。過去20年程の間に、内戦やテロリズムなどの非伝統的な安全保障への脅威についての研究は、大きく進んだ。これらの暴力の内、約半数は、民主主義国もしくは(選挙などの民主的制度を持ちつつも権威主義的な統治が行われている)準民主主義国において発生している。だが、民主的制度の構成要素特に議会と政治的暴力の展開との関係については、ほとんど研究が行われていない。

既存の内戦研究の多くは、国家側のアクターとして大統領などに代表される行政府に注目する。しかし、(準)民主主義国では、議会は、立法(の阻止)や行政府の監視、有権者の声の代表などを通じて、行政府や反乱軍、そして両者の関係に影響を与える。したがって、(準)民主主義国における政治的暴力の展開と収束を説明するためには、議会が政治的暴力に対してどのように反応し、それが反政府武装勢力や行政府に対してどのような影響を与えるのか、を分析する必要がある。本研究では、特に前者の問いについて研究を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、政治的暴力に対して議会や議員がいつ、どのような反応を示すのか、を記述した上で、その背景にある要因を分析することである。特に、議会における議員の発言を議事録から収集し、テキスト・データを構築する。その上で、自動内容分析や回帰分析を用いて発言の内容やタイミングを分析する。

このような研究は、既存の紛争研究に対して、大きく3つの点で貢献する。まず、国内外の紛争研究において議会は軽視されてきた。議会と内戦の長さの関係についての分析や、国際的テロに対して先進各国議会が立法措置を取る迄に要した期間の分析が、いくつか存在するのみである。本研究では、主に比較政治制度研究や準民主主義政治体制の理論を援用しつつ、理論の構築を行う。

次に、政治的暴力の展開に対する議会や議員の影響を分析するためには、まず議会や議員の反応(政治的関心の配分や発言)を記述する必要がある。更に、どのような条件で議員が反応する傾向にあるか、特に政治的暴力が議員の反応に影響を与える可能性について留意する必要がある。本研究は、議員の発言やその要因を特定することで、議会・議員が政治的暴力の展開に与える影響を分析するための基盤を準備する。

最後に、紛争経験国議会における「語り」を分析するため、主に先進民主主義国議会の研究で発展してきたACA手法を用い、体系的かつ効率的に分析する。政治的暴力の発生頻度が高い準民主主義国や発展途上国の議事録の実証的な研究は、研究代表者らの分析を除けば、ほとんどない。政治的暴力の過程における「語り」の実証分析は、議会・議員に限らず、ほとんど行われていない。一部の政治家の発言やツイッターの分析が出てきているが、これから研究の発展が望まれる分野であり、その観点からも、本研究は重要である。

3. 研究の方法

本研究の目的は、政治的暴力の展開に対する議員の反応を記述し、その背後にある要因を分析することである。その際、議会議事録に記載されている議員の発言を資料として活用する。議員発言は、2つの観点から重要である。まず、議員発言は各議員の政治的関心や戦略的意図を反映する。次に、議員発言は議会の決定などを通じて、行政府と反乱軍との関係に影響を与える。

議員発言の分析に際しては、研究者によるテキストの読み込みと自動内容分析を組み合わせる。その内容やパターンを把握・記述する。その上で、その背後にある要因について、回帰分析を用いて分析する。さらに、現地調査を通じて、オンラインでは入手困難な議事録など資料収集を行うと共に、議員や有権者などへのインタビューを通じて、質的データの収集・分析を行う。

事例としては、フィリピン、コロンビア、ナイジェリアの3つの国を選択した。これらの国は、いずれも準民主主義国であり、内戦を経験している。しかし、国内の政治制度や反乱軍のタイプが異なる。このため、個々の事例についての分析だけでなく、比較事例分析を通じても理論的洞察を得ることが可能となる。これら3カ国の分析を行うことで、今後の政治的暴力と議会の「語り」についての研究の端緒とする。

4. 研究成果

(1) データの準備

本研究では、フィリピンの議会の下院(2007年-2017年)、コロンビアの国会下院(2002年-2006年)、ナイジェリアの国民議会上院(2012年-2022年)の議事録を収集した。その上で、テキスト・データへの転換とクリーニングを行った。その結果、各議会開催日における個々の議員の発

言についてのデータセットを構築した。但し、ナイジェリア上院の議事録については、一部欠損している。更に、各議員の属性や選出選挙区などについてデータを収集した。これらのデータは、一部研究成果の公開を待ってオンライン上で公開予定である。

(2) 実証分析

再選動機と発言

既存研究は、議会の強さが内戦の長さなど、政治的暴力のマクロな特徴に影響を与えることを指摘している。しかし、そのメカニズムについては、議論が分かれている。研究成果1では、準民主主義国において、議会においてどのような議員が政治的暴力に言及するかについて、特に再選インセンティブに注目して仮説を立て、検証した。まず、フィリピン議会下院本会議での議員発言をトピック・モデルによって分析したところ、違法薬物、警察と人権、軍の強化、和平合意といった政治的暴力に関連するテーマが確認できた。これを踏まえ、ロジスティック回帰分析を行い、再選インセンティブの大きな議員ほど違法薬物や警察と人権のテーマについて発言する確率が高いことが分かった (Lewis ほか 2019)。

政府の市民に対する暴力と議員

内戦下で議員に期待される役割の1つは、政府の市民に対する暴力の監視である。議員達は実際に政府の市民に対する暴力を制約するために行動するのだろうか？本研究では、政府による暴力が発生した選挙区選出の議員は、治安部隊の規律に関わる発言を行う傾向にある、そしてそのような傾向は特に彼らの再選可能性が低い時に強まる、という仮説を立てた。その上で、フィリピン下院の2007年7月から2017年5月までの議事録をトピック・モデルとロジスティック回帰分析を用いて分析した。その結果、政府軍による市民に対する暴力の激しい選挙区選出の議員ほど、治安部隊の規律について多く発言する傾向にあること、その傾向は前回選挙での得票マージンが低かった議員ほど強いこと、が確認できた (Watanabe 2022)。この分析結果は、暴力の被害を受けた地域の議員が市民の声を代弁し、治安部隊への監視を強める傾向があること、但しそのような傾向の一部は再選に向けた戦略的な発言であることを示唆している。

和平プロセスと議員

内戦下の議会・議員は、和平協議のプロセスにも重大な影響を与えうる。反乱軍との協議が進んでいる和平合意の署名や批准、実施について、議員達はどのような態度を示すのだろうか。議員の主な目的は再選であり、そのために自身の選挙区の有権者の選好に沿った発言を行うと考えられる。このような仮説の妥当性を検証するため、まず、Latent Semantic Scaling (LSS) を用いて、フィリピンの下院議員の和平プロセスに関する発言を特定し、発言内容が肯定的か否定的かを数値化した。その上で、選挙区での暴力発生頻度、選挙区内のムスリムの割合、そして有権者の行政に対する満足度が議員発言の内容に与える影響を、最小二乗法を用いて分析した。その結果、選挙区での暴力発生頻度は選出議員の発言に統計的に有意な影響を与えないのに対して、選挙区内のムスリムの割合が大きいほど、そして有権者の行政に対する満足度が高いほど、議員は和平合意に肯定的な発言を行う傾向にあることが分かった。(Wanatabe et al. 2023)

軍・市民の犠牲者と議員

民主主義の対反乱政策についての多くの文献は、有権者が費用に不寛容で、犠牲者の発生に敏感であるとの仮定に基づき、犠牲者の発生によって議員は政府に対して反乱軍と和平合意を締結するよう働きかける傾向にある、と主張する。しかし、そのプロセスにおける議員の役割については論じていない。本研究では、内戦における犠牲者数との拡大によって、実際に議員が和平合意に向けて働きかけを強めているかを、コロンビアを事例に分析した。具体的には、死者数の変化とコロンビア議会下院における議員発言との関係について、トピック・モデルとロジスティック回帰分析を組み合わせて分析した。その結果、まず、議員は市民の犠牲者については一定の時間を割いて発言を行なうが、軍の死者についての発言は少ないことが確認できた。次に、既存文献の主張にそって、一部の議員は犠牲者の数が多いほど、市民の犠牲について発言し、その上で和平プロセスを追求する傾向が確認できた (間接効果)。但し、このような間接的な効果に加えて、非国家主体の市民に対する暴力による犠牲者の数が多いほど、議員の和平プロセスについての発言が減少する傾向にあることも確認された (直接効果)。これは、少なくとも一部の議員は非国家主体の市民に対する暴力を踏まえて和平プロセスをサボタージュする傾向があることを示唆している。また、政府の市民に対する暴力による犠牲者の数は、議員発言に対して統計的に有意な影響を与えていない。(Boesten 2022)

(3) 今後に向けて

本研究の成果は、3つの観点から重要な意義を持つ。まず、フィリピンとコロンビアの双方で、

議員が内戦中の市民に対する暴力や和平プロセスについて発言することが確認された。但し、フィリピンでは暴力が激しい選挙区選出の議員や過去に選挙で苦戦した議員が発言する傾向があるのに対して、コロンビアではそのような傾向は見られなかった。フィリピンとコロンビアにおける分析結果の違いは、再選動機の有無ではなく、再選動機を媒介する制度の違いを反映していると推測できる。したがって、今後、この分野での理論構築をさらに進める必要がある。次に、コロナ禍での現地調査の遅れや収集資料の特性により他の事例と比べてデータクリーニングに時間を要したことで、ナイジェリアについての研究は現在進行中である。こちらの研究を進めることで、上記2事例との比較分析が可能となる。また、本研究では主にどのような政治的暴力が議員の内戦に関わる発言の増加や減少につながるかを分析した。それに対して、議員の発言が政治的暴力に与える影響については、分析できていない。今後そのような分析を進めるにあたって、1つの課題は内生性の問題である。本研究の分析結果は、この問題を緩和するための一助となる。最後に、今回の分析に際して収集したフィリピン、コロンビア、ナイジェリアの議事録のテキスト・データと関連する議員データは、今後公開を予定している。論文発表時の追試用データだけでなく、収集した全てのデータを公開予定である。これらのデータを用いて、内戦だけでなく、経済や社会保障など多様な問題についての議員発言の分析が進むことが期待できる。

引用文献

1. Lewis, Jonathan, Naoko Matsumura, Kazuhiro Obayashi (2019) “Legislative Speeches and Political Violence: The Case of the Philippines.” 欧州政治学会 (EPSA), 「議会演説II」パネル、クィーンズ大学ベルファスト、ベルファスト市、英国、2019年6月20日。(Aya Watanabeとの共著)。
2. Watanabe, Aya (2022) “Conflict Dynamics and Domestic Politics: Media Coverage of the Mindanao Conflict in the Philippines” 日本国際政治学会、2022年度研究大会、10月30日、理論と方法分科会。
3. Watanabe, Aya, Kazuhiro Obayashi, Naoko Matsumura, Jonathan Lewis (2023) “Government Violence against Civilians and Legislators’ Speeches during Conflict: A Quantitative Analysis of Hansards in the Philippine House of Representatives” Manuscript. (Under review)
4. Boesten, Jan (2022) “Legislatures and Violent Conflicts: A Case of Colombia” Paper presented at the EPSA 2022 Annual Convention, Panel: Security in Latin America, 6月24日。(Yuichi Kubota, Jonathan Lewis, Naoko Matsumura, Kazuhiro Obayashiとの共著)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Jan Boesten, Yuichi Kubota, Naoko Matsumura, Kazuhiro Obayashi
2. 発表標題 Legislatures and Violent Conflicts: A Case of Colombia
3. 学会等名 International Studies Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Aya Watanabe
2. 発表標題 Conflict Dynamics and Domestic Politics: Media Coverage of the Mindanao Conflict in the Philippines
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 渡辺綾、久保慶一
2. 発表標題 Conflict Dynamics and Domestic Politics: Media Coverage of the Mindanao Conflict in the Philippines
3. 学会等名 日本比較政治学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ジョナサン ルイス、松村 尚子、大林 一広、 渡辺 綾
2. 発表標題 Legislative Speeches and Political Violence: The Case of the Philippines
3. 学会等名 日本国際政治学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Jonathan Lewis, Naoko Matsumura, Kazuhiro Obayashi
2. 発表標題 Legislative Speeches and Political Violence: The Case of the Philippines
3. 学会等名 The 9th Annual Conference of the European Political Science Association (EPSA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuhiro Obayashi, Aya Watanabe
2. 発表標題 Legislative Speeches and Political Violence: The Case of the Philippines
3. 学会等名 Workshop on Armed Conflict and Political Economy of Development (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Jan Boesten
2. 発表標題 Legislatures and Violent Conflicts: A Case of Colombia
3. 学会等名 European Political Science Association (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松村 尚子 (Matsumura Naoko) (20778500)	神戸大学・法学研究科・准教授 (14501)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	窪田 悠一 (Kubota Yuichi) (40710075)	日本大学・法学部・准教授 (32665)	
研究分担者	LEWIS Jonathan R (Lewis Jonathan R) (60282589)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	
研究分担者	玉井 隆 (Tamai Takashi) (40845129)	東洋学園大学・グローバル・コミュニケーション学部・准教授 (32520)	
研究分担者	渡辺 綾 (Watanabe Aya) (30880455)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センター動向分析研究グループ・研究員 (82512)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	Boesten Jan (Boesten Jan)	ベルリン自由大学・Institute of Latin American Studies・DFG researcher	2019年まで英国オックスフォード大学所属。2019-2021年は、オックスフォード大学とベルリン自由大学のクロス・アポイントメント。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 The Remains of the Day: Effects of Experience under Authoritarian Regimes on Political Nostalgia after Democratisation	開催年 2022年～2022年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

ドイツ	ベルリン自由大学			
英国	オックスフォード大学			